2023年度共立女子大学
文芸学部
総合選抜型入学試験　授業

2022年10月23日

授業のはじまり

『家売るオンナの逆襲』（2019）

第3話　あらすじ

三軒家万智（北川景子）が、キャリアウーマンの木村真奈美（佐藤仁美）から夫・剛史（池田鉄洋）と娘の三人で住む家を相談される。忙しい夫から家探しを任されているという真奈美だが、万智が仕事帰りの剛史を尾行。自宅ではないアパートの一室に入って行く姿を目撃する。部屋をたずねると、女物の着物を着た剛史があらわれる。剛史は、自分の性別に違和感を感じながらも社会的には男性として生きてきたトランスジェンダーだった。女性として生きたいという剛史の気持ちを受け入れられない真奈美は、家を買いローンを組むことでなんとか家族の関係を続けたいと思っていた。

映像を視聴します

『家売るオンナの逆襲』第3話（2019）の1シーンをみます。

だれが、
どんな衣服を着用していましたか？

ドラマスタイリスト・
西ゆり子さんの証言から考えます

西ゆり子『ドラマスタイリストという仕事』（光文社、2021年）に記された証言から、視聴した映像に見られる衣服に工夫がこらされていることがわかります。同ドラマのスタイリングを手掛けた西さんは、クールで極端な性格の主人公を表現するには、ビビッドカラーをあわせた常識では考えられないようなスタイリングを心がけた、と回想しており、その証言をふまえて映像をみかえすと、衣服にこらされた工夫に気がつくと共に、衣服から、着用する人の性格や暮らし方、癖などを無意識のうちに連想している自分に気がつきます。

衣服の色と形にこめられた「意味」

こういう服を着る人は

こういう人だろう

劇映画・ドラマ・アニメーション映像における衣服は演出された表現でもある

みずからのうちにはたらく
「視覚的無意識」の力を
豊かにふくらませましょう

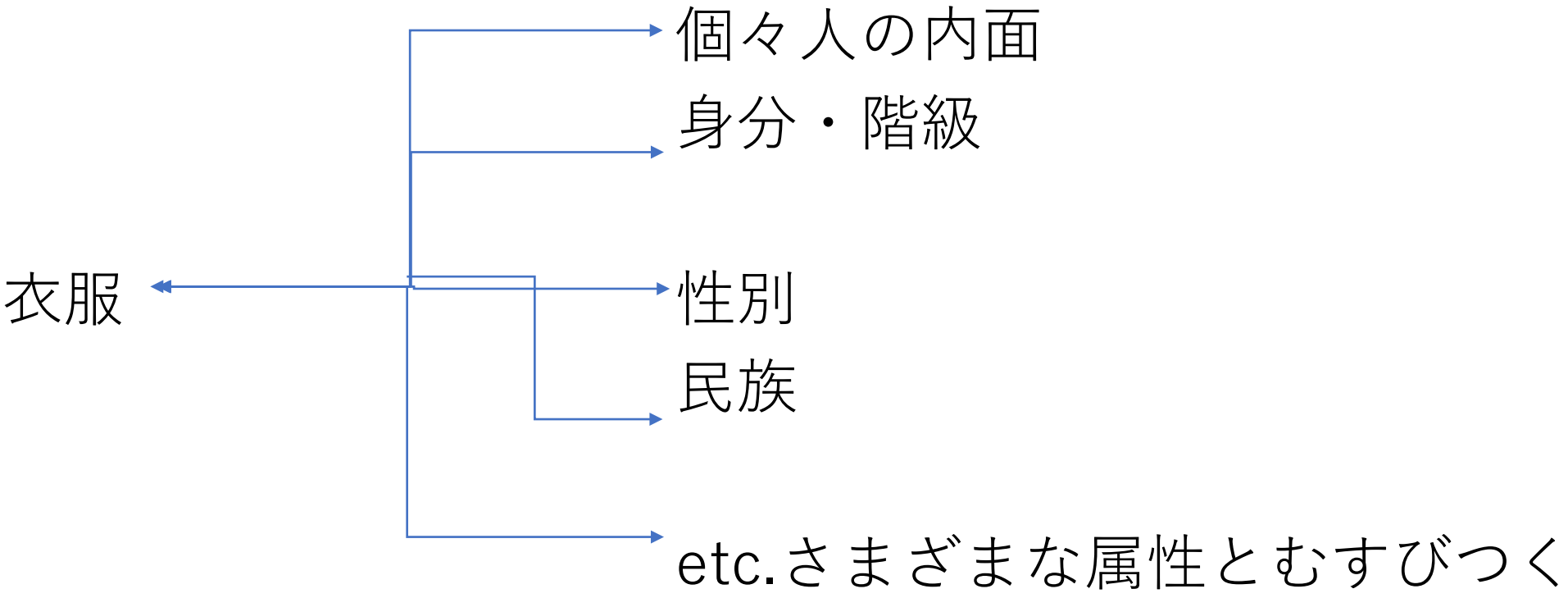
本日の授業のテーマ
映画と衣服

テキストとしての映画衣装

日本における映画衣装デザイナーの先がけ森英恵（もりはなえ）の証言

森英恵『ファッション　蝶は国境をこえる』（岩波新書、1993年）で森は、白黒映画では衣服の形と動きで人間の性格とキャラクターを表現していたが、カラー映画になると色で人間のキャラクターが表現できることに興奮した、と述べている。

個人の内面と衣服の色・形をむすびつける考え方が浸透したのは比較的近年のこと。



身分をあらわす衣服として

黒澤明監督作品『乱』溝口健二監督作品『新平家物語』で使用された時代劇衣装のデザインスケッチを紹介しました。

- 黒澤明が映画『乱』のために描いた衣装スケッチ
- 水谷浩が溝口健二監督作品『新平家物語』のために描いた衣装デザインを紹介

衣服の映画としての『ローマの休日』（1953）

映画『ローマの休日』の1シーンを見ながら考えました。

あらすじ

ローマを訪問したアン王女(オードリー・ヘップバーン)は王女の仕事にうんざりして、街へぬけだす。そこでアメリカ人記者（グレゴリー・ペック）と出会い、公務を気にしながらもやりたいことを満喫する中で、恋愛感情をいだくようになるが、アンは王女にかえっていく。

- 着がえ、はきかえ、髪をきることが「変身」として表現されることに注目しながら『ローマの休日』の映像を視聴します

レイチェル・モスリーの研究によると

1950年代のオードリー・ヘップバーンの映画とそこでの服装は、生まれながらの階級をこえて生きることの可能性と難しさを象徴しています。仕事や結婚をめぐる緊張をえがきながら、1950年代、先進諸国で自分で仕事をもって生きる女性のライフスタイルが浸透していく中で、身分をこえて自活しようとする葛藤を体現したことが、オードリーが共感を呼ぶスターだと感じられた理由でもある。女性史におけるこの重要な時期にあって、オードリーのシンデレラ映画は、社会の中にありながら、社会の一員になること、この世の中で生きていく自分になることへの不安を劇的に表現していた。

レイチェル・モスリー（／モーズリー）（黒川由美訳,一部原書にもとづいて授業者が翻訳）『オードリーの魅力をさぐる　Growing up with Audrey Hepburn』（東京書籍、2005/2002）を参考に考えます。

ふたたび『ローマの休日』の映像を視聴します

衣服の変化をおしすすめた身体の解放

女性解放思想の浸透や世界大戦下での女性の職場への参加

↓

女性がみずからの身体でうごき生きる歓びを活性化

↓

ココ・シャネルらの才覚が手伝って、コルセットによる矯正から解放された身体の動きを自由にする衣服が普及していく

布地から女性を解放する傾向がすすむ

仕事やスポーツに女性が参加する機会がふえることで、女性が身につける衣服はかろやかで、布面積のすくないものへと変化していった。簡素になった現代の衣服によって、女性も男性も、それまでには思いもしなかった身のこなし方やふるまいを発見させることにもなったのです。

【フィリップ・ペロー（大矢ヤスタカ訳）『衣服のアルケオロジー』（ちくま学芸文庫、2022年）】を参考に考えます。

ファッションの歴史についての映像を視聴します

19世紀から20世紀にかけての、西欧の女性が身につける衣服をシンプルに紹介した映像を見て、うごきやすい服装に自由をかんじる傾向が衣服の変化をおしすすめていたことを実感します。

衣服をめぐる法・刑罰・規則の変容例

- 明治4年（1871）　裸体禁止令
  肌をあらわにして暮らす風習が法令によって禁止された。
- 明治6年（1873）　違式詿違条例（いしきかいいじょうれい）に「異性装」の禁止条項がくわわる。

↓

なぜ服を着ないといけないのか？　なぜ、衣服に性差があるのか？　そうした疑問にはさまざまな解答があるが、規則や刑罰の規定が意識におよぼしている影響も忘れられない。

日本初のファッション・ショーが意味すること

1927年に日本ではじめてとされるファッションショーが開催され、映画女優がおおきな役割をはたした。

↓

１：映画の普及と衣服の意識が連動していること

２：服飾が産業として確立していくことで、お金をだせば、誰でもが好みの衣服を着用できる状況が出来上がっていったこと

↓

【坂本佳鶴恵『女性雑誌とファッションの歴史社会学』（新曜社、2019年）を参考に、従来の身分観にもとづいた女性のタイプについてのイメージがゆらぎ、服装の現代的な流行の減少がひろまることを考えます。

古来から世界中にみられる異性装

- 『家売るオンナの逆襲』第3話（2019）の異性装のシーンをみます。

身体の動かしやすさといった「機能」よりもむしろ、さまざまな「意匠」「装飾」にこそ衣服の不思議と魅力はある

アルベール・カーン（1860-1940）の地球映像資料館

『アルベール・カーン　奇跡の映像』の映像を視聴しながら考えます。

カーンは、1908年ころから1930年代にかけて、カラー写真と映像によって、世界中の人々のさまざまな暮らしぶりを撮影した。現代の「流行」現象などによって失われていったさまざまな衣服の色と形が、カーンが遺した映像には記録されている。

清水宏監督『有りがたうさん』（1936）を視聴します

チマチョゴリの白さの意味が
なぜわかるのか？

韓服の１つであるチマチョゴリは現在でも、色とりどりに着用されている。

しかし、特に日本が統治下においた1910年代から40年代にかけては、白いチマチョゴリがよく着られ、その白さには、朝鮮民族のアイデンティティをあらわす意味がこめられていたと言われている。

衣服の意匠には、さまざまな意味がこめられてもきた。カーンの映像に記録された今はわすれられた数々の意匠も、映画にうつされた衣服のさまざまな色と形も、読みとかれることを待っている。

映画にうつされた衣服を
テキストとしてとらえることの魅力

１：こういう服を着る人は、こういう人だろう。衣服の色と形から視覚的無意識で連想する個々人の内面を、よりクリアーに理解できる力を得られる。

２：衣服の色と形に感じている視覚的無意識のはたらきを、重層的にとらえる力を、豊かにするキッカケをえられる。

３：衣服の意匠にこめられてきた、こうありたい・こうあってほしいという他者と世界への願望をとらえる力を得ることができる。

着がえることで変身できる

- 『ひみつのアッコちゃん』『美少女戦士セーラームーン』『フレッシュプリキュア』の変身シーンを視聴し、魔法少女の変身が変態から着替え・メイクアップへと転換したことの意味を考えます。